



317
3
3



東都花華園著

瀧樹 たきのき

劍輔 けんすけ

述匠山賊傳 じゆじやんざくでん

北泉戴岳画



本宗



世間何物最堪憎蚤

至蚤蟻花戒僧船

律車夫并晚

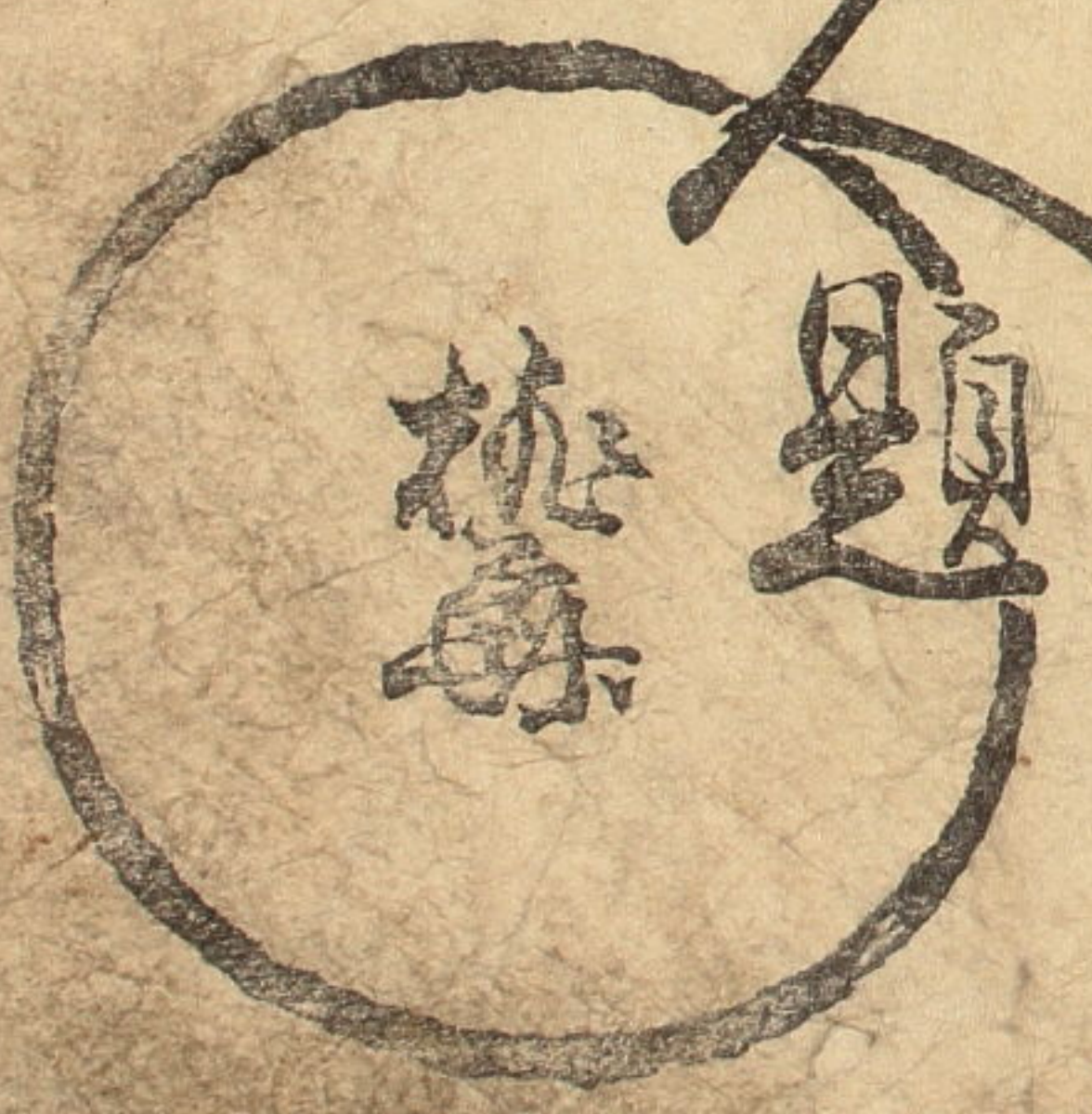
母濕茶螺岩水油

門入遊3
號 317
卷 1

燈注家私能跋涉人
有而推察世情又復
不可獲焉儂此忠
臣山賊傳因松子庭
有是詩矣

時文政丙戌初春
浪弄熾博甫

松志少題



山賊傳

卷二





隠家也

月々ぬら
軒廻栗

悪僧
寂陰阿周梨

後
須恵女
生方

山見傳卷之一



頼子

毒婆

村尾

角
相
婿

劍助

山見傳卷之一

三



胡蝶
上

忠臣
左衛門大夫
正盛



蜂
可
也
夢

那
の
梅
伸
永
小

那
俠客

おのけのきんろく
鬼竹金六

劍助妹
田女

山見傳卷之十一

三

武陵の桃善先生忠臣山賊傳を一切を以て
其孝義乃學園の類を以て重んずる
其法を道に近づけしむ嗟乎先生の愛を
至忠孝義勇よくそふて皇劍即成し
使客の首領を以て實小男中の男と也
魚支と是をよ美しとてか、南毛

幅度ふ糸も物も布の二端がけたまま
なり類おれこ一足

右

南里亭 女貞

忠臣山賊傳總目錄

- 一卷
 - 曲竜遁雲
 - 二兎企反
 - 乙斥殺機
- 二卷
 - 六狼醜鬪
 - 至忠竊間
 - 僧媼俱惡
- 三卷
 - 私曲設偽
 - 孝子怨母
 - 奸佞滅角

滝木劍助が由緒將軍義澄京都と忠
出美濃路小迷く劍助小達食をこ
あより仁木俊勝父子謀反義澄公害
せんを企劍助系譜を知て大志を起す條
野上の里般昌男他小劍助が徒弟と論を
仕出し闘争ふるや、村正風姿を終装し
劍助と劍法をくらふ大半をこのむ清より
村尾寂法小和射田司分悪く小組する條
和射田司寂法村尾をかりし劍助を刺客
として義澄公討甘んじ我をうめり
劍助杜鵑花峠ゆく人吉れす和射田と討
り劍助を從類疑を受る都下捕る條

西卷

傑丈結義
公私漸訟
逆心再計

五卷

車夫盪姪
箇儂受録
兩暴奪女

六卷

俠膽刺客
列士忍典

忠臣山賊傳總目錄畢

劍助黨を指葉山小集より劍助が從類

仁木則勝が為小踏阿せより官領若名

清川仁木が私曲を糾す浪寂法村尾木九七

を以て劍助が妹末女を勾引きんと討つ條

車力九七劍助の妹末女を勾引し義澄公至

從不見替らぬ命を執りて三縫因兵衛

武士小より互らゆ浪村尾寂法再び末女

を奪ひて正感がよめ小命を執りて條

妻木小孫太劍助のよめ小東山殿の管中

小忍典仁木俊勝父子をよめ一味のやう

討つ其身も功死す浪劍助妹園生乃

乃典小忍棄て管中小より浪村尾を條

忠臣山賊傳卷之一

西龍遁雲

東都 挑華山人 著

唐土魯のよ小姉妹住居女に時国のよらふやうに後を
款小押あて漏れる洞を扱つよと泣くを思ひ妹の是成
りよ〜〜の姉が膝下小をとり〜〜姉君小何して斯を款小
くよめいつ〜〜年長よめぬ近も縁の遠を款せよよあやみ
け免去あ〜〜頭〜〜然分れ方小嫁〜〜何〜〜有世〜〜の
約束や〜〜ば〜〜のよよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜の
と洞を弄〜〜の面〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜の
娘のよ縁〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜のよ〜〜の

まゝのまゝおはあつた如何あたるをうぢげたおつゝあつた
ゆや姉さまにて云々今や世の若年をささむ御子さまの幼稚
ほりゝ然のまゝあつたつゝお侍臣のまかりして下りゝふと
忠義の徳をいふ事なかりけり世を治るるもあつた
りゝ妻が公ふるを侍りて思ひ出る度でもあつた
くまを命をありと妹は是を思ふもあつた他人の
うの事ふことと命を御方よりけむいゝ斯はうい
あげたまゝと命をわづらふとつゝお姫さまとあつた
ふもあつた世の夏は准の上もあつたまゝ今や若年乃ま
より火を焚く吾をを焼く今や秋は西隣小娘を
く妻が兄是を故に死にけり今や若年乃ま

一と世の葉あつたつゝ西のまゝあつた小生涯から
あつた唯今も乃君と老のまゝ御子にけあつた
つゝ御方弱くあつたつゝ人々甚強しお小猫もけ
まゝも風向直小強がり身妻が平日小つれいゆ
たあつた所ありとつゝ其後つゝ経を過すつゝ果
りあつたつれゝとつゝお例の彷彿しつゝあつた
の庄小若お六つゝお例の彷彿しつゝあつた
む大内義弘の舎弟義包より四世の齋小つゝあつた
為光が孫あつたつれゝお孫小つれゝあつた
竜興が道小正つれゝあつたつれゝあつた
皇縫小退き耕作を

好と里民乃愚あるを教諭しなれば所う作と作ぬてぬ
言のころころひあく爲先より我六ふころ三代を經ぬまむ
人ふ呼と皇縫射六ととあへる此射六小男引一人女子
二人のり兒を劍助とひ妹を田女とひまの子をま子あ
まむととあまむととと号とり兒劍助と十歳う頃より
常刀人ふあさりてままらる牛をとらめ千曳う石を搦し
動うととどふ豪傑ありなれむ。又もいと教母しと思ひう
強し折うとあまむ良大将ゆも陸軍と再慶又祖のあ
名をも記さるやと思ひまむ田女かーとれ生貨あくとふ
書籍ととむとふ好々まむとある方へも嫁々んと且夕ふ
心をとむりてわたりりは其ころる人皇百四代乃帝後三山

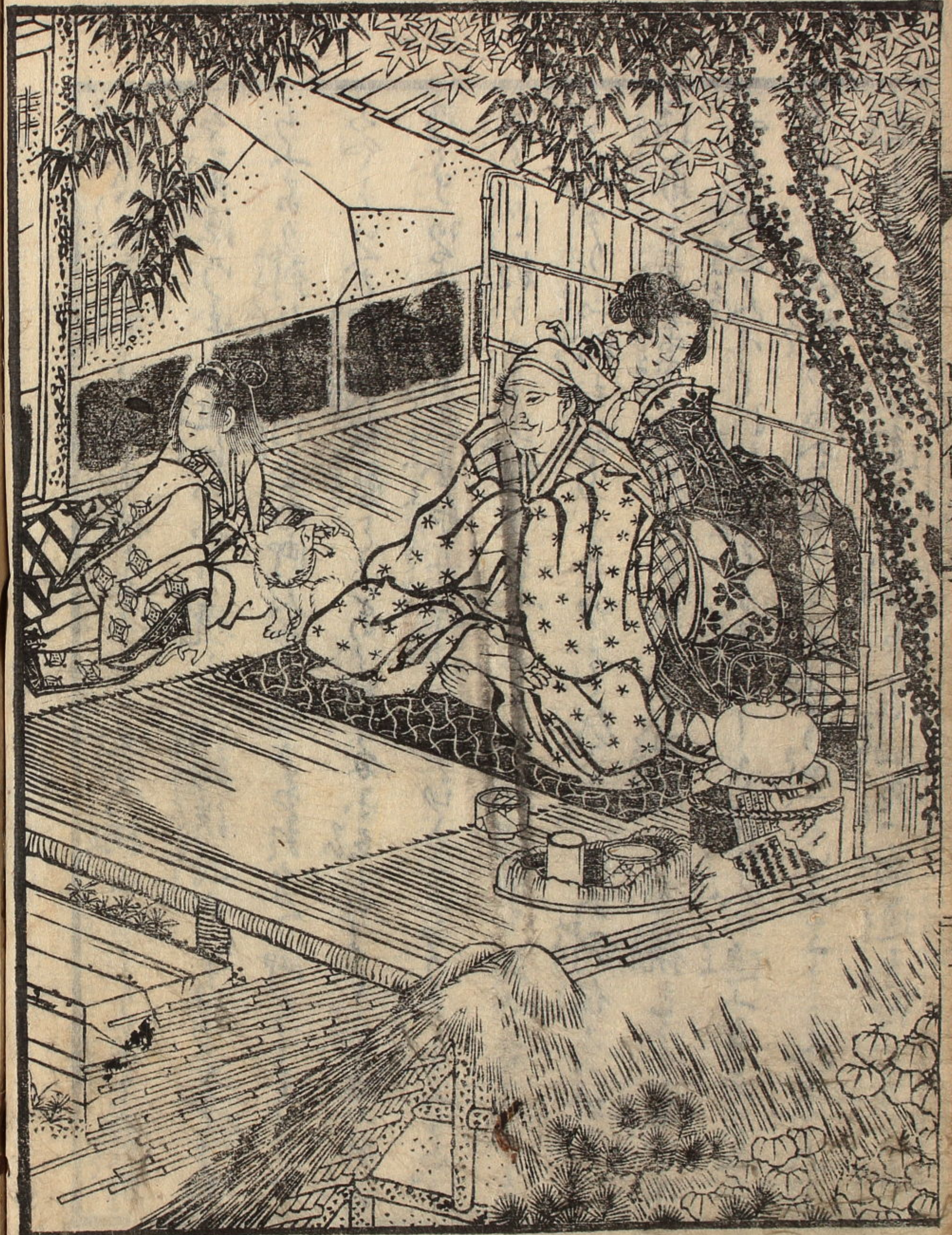
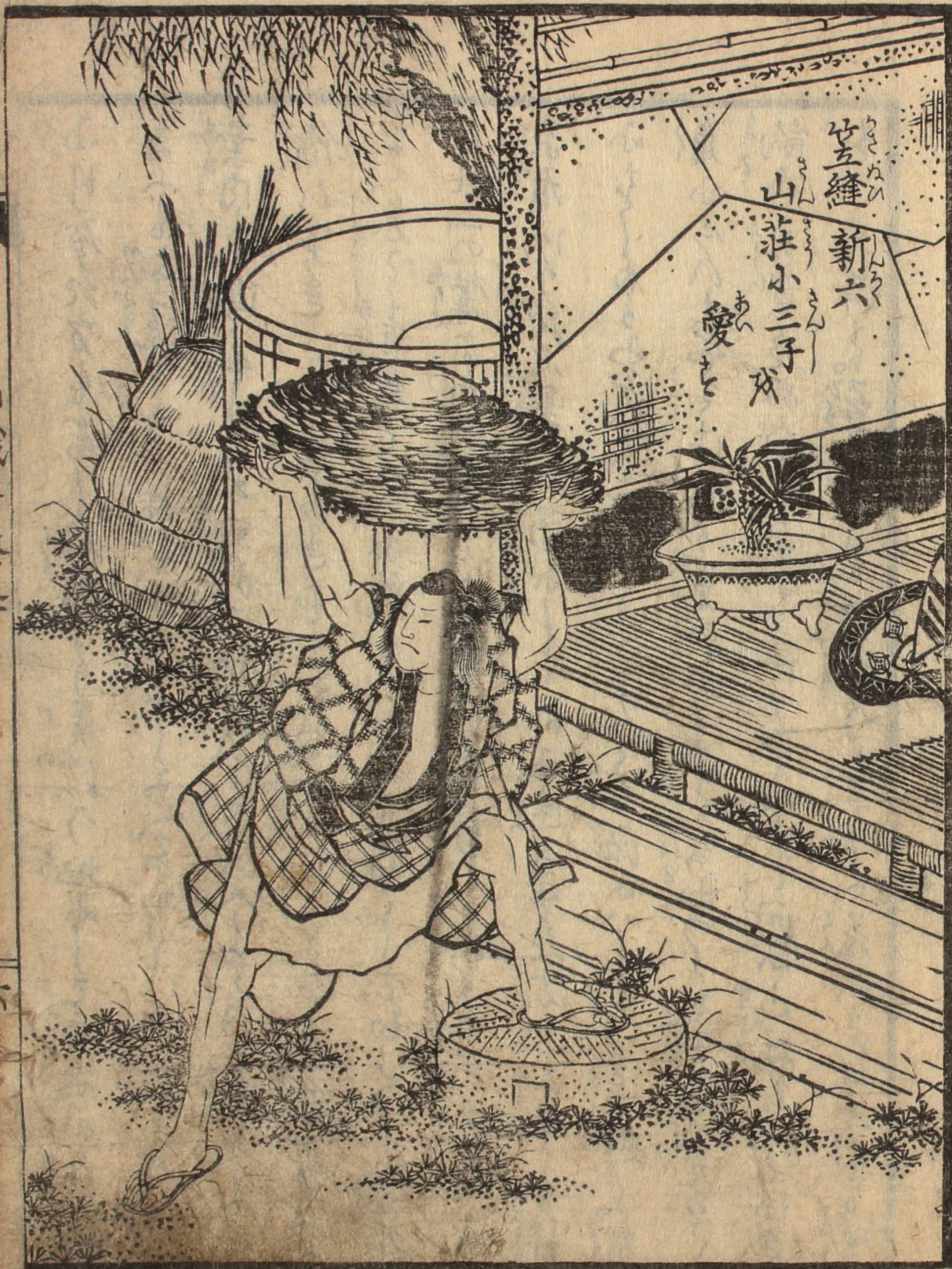
門流乃御宇延徳二年庚戌の如月乃とありなれど東山どの
薨去の如く北の屋ある大政所女儀ふととあまむと天下の
政勢ふあつりあひ義澄公も將軍宣旨の御沙汰をなす
ひとふ継し九御中ゆありと緒人の噂しりかあまむが
果しと義澄公小八館をむさむひと近江の志賀の山寺
小入ふ道遠ゆつととあまむ武士小八孫井右衛門依貞頭三位十
郎太史俊政小山次希成重あり。此所小八如何あつたか貞
頭が本領美濃乃とあまむ船本山を赴あふふ流をとり
まより跡をうたぐりゆもまむ山中ふまよふ種はれ
く進退ふ小窮しとやあまむと列位心を擲し
十丈をるもあまむ谷の危ふ人のまむ集りてものつと

小中よえしきこむ小山四郎成重らりしりけられた武士の
 國業をまゝおきおき進んでゆくゆくは此谷うげふこを拙山
 越の三好あど越へ集降しつてにやぐをくだりしあはしくも
 餉の用意あんどがあふすもたふはあはしくはあなを
 思ひしふらけつても彼晋の重耳が子推の股肉を食
 せしも成も思ふ中せよし。住通るるれ跡もあはるる谷
 をあでひて争奪しつて見ると山山越にたはらひわ
 物語ふあふすし。今より屋の谷あはの巖小むをいぬれ
 昔の人のものいふ中ふあえしあり成重はらのこも切りか
 けたせれんく此ありしも捧やわらせよせよと八咫のつまこま
 さへはるる益もあはれを衣衣のたの社を引きたりして岩間の

滝ふあふさふしあふ谷あをいして刃の鹿卷ふをくす
 糸をくくつて結ぶつての麻着ふよりつた本なる根ふさ
 志がりにて置をくくけ。陣しりて奉し道ふえりしひさ
 袖を押経りて。素足しりか此あを業ふ受つて咽をうた
 たし。あはしく御心根らつてつては。けしむも強れた武士も
 心をや。心はくも捨てん。冬をゆそとをわたり去りて
 山頭寂し。一羽の鳥乃邊ふあ。鹿柄を掛し。雲乃空
 つし。あはしくあるも雨さの雲あはるる感せり。あはしく
 あり。えん。義澄をを。ねし。三人の人等もあはしく
 小たし。松本豆をまきふし。たてのり。あはしく。あはしく
 如く。あはしく。あはしく。山をみる。軍の玉。あはしく。あはしく。

賣を思申うらふつものさびあつたもの心をつつと鶴子鳥交
 うらぬらさるり〜おぼつあも山中小物の音のせえはたれ
 とも豊ほど満き〜樵まろ芥のこゝろあまきんも力を以ち
 人も便を好く細丸草此小路をたどり谷ふり〜ちを獲を
 とも嶺をたつてい〜九十九坂をりふ本深丸杖のち甲ある煙
 指とりき〜いう腰小多能が丸お半夫小のちを〜さまが〜銀
 河を眼前小芥手小似〜ろ産小芥〜ちま〜二十小もほ
 さま遅〜丸小杖の〜十拱もあ〜む〜杖の大木を
 唯一人又芥揮あげ〜根をうつあり〜今〜の坂道を下き〜る戎
 芥とち〜い〜刃わ〜〜が溝門佐負頭足をとち〜丸杖が傍
 ふ〜つ〜極〜い〜れ〜や〜と〜梓此所〜何〜つ〜の地ち〜と〜を

山内ハ既ふ巻〜教手杖を〜つ〜と芥の柄ふ〜と〜り〜ま〜。此所
 ち美濃のふと近江のふり境ある綿洗村のうちあ〜と〜さむ
 りふあり列位々何ふの町人あ〜つ〜あ教方へ御〜〜り〜教
 ちや〜と〜た〜と〜杖〜と〜態〜と〜は〜あ〜ぬ〜さ〜ふ〜云〜あ〜〜教〜ふ〜ハ〜杖〜結
 乃〜と〜何〜さ〜〜美濃小船ふ〜と〜さ〜〜ち〜ひ〜者〜あ〜り〜と〜さ〜ふ〜さ
 あ〜と〜教〜と〜〜り〜の〜ち〜や〜と〜同〜如〜何〜ふ〜も〜教〜の〜者〜あ〜り〜と
 道筋を不案内と分んえさむ〜と〜此所〜と〜〜辨〜さ〜る〜者〜い〜と
 又も此山人〜と〜れ〜往〜来〜さ〜る〜道〜ふ〜〜と〜徳〜人〜の〜通〜不〜通〜方〜ふ〜ま
 さ〜と〜ま〜び〜此所〜ふ〜入〜ふ〜ふ〜と〜蔬〜せ〜る〜里〜と〜〜と〜ま〜よ〜り〜つ〜ま〜れ〜た
 束〜と〜ま〜め〜ハ〜さ〜る〜道〜あり〜路〜ち〜と〜細丸一筋道をた〜と〜つ〜て〜外



小川原の方もある。此所より異流の地より舟本へ赴き
 あり本道よりある程むかし来りてある所より程
 葉肉へ進みゆくも四の五のいふも日の入を待てぬ近き人
 備ひ置きてゆくも亦あきむあひだりて来りてゆく進み
 せし急ぐ青葱といふ所までたどりたるともいふなり其
 ら此山の麓より三里をゆくを下りて切りたつて五折を
 ぬるなり八是も一筋ありて外に迷ひぬれ方もあると
 小をゆくもあざむきを始りてゆくも飯小へつ道遠く
 角小のあやまはるがくはるがくかきひくも出つて男小
 餉乃月賣ぬぬりてゆくもいふなり同小へゆくとたむ
 をくもむけりて登りてゆくも先ゆりてゆくもいふなり

く於人乃街はふあふぬれもいふしもあるばれあり其
 ありたるもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 たりとて草乃根を垣きゆくも谷小とたむとてゆくも
 小出ゆく端のうらふけりてゆくもいふなりとてゆくも
 く編りてゆくもいふなりとてゆくもいふなりとてゆくも
 くるも餅のいふもいふなりとてゆくもいふなりとてゆくも
 くるも空腹ある折りてゆくもいふなりとてゆくもいふ
 ありりりり斯めくはは男中多敷に去ぬる元弘の兵乱
 塔の宮も軒敷のいふもいふなりとてゆくもいふなりと
 らま一折りも飯小へゆくもいふなりとてゆくもいふ
 あり心のいふも絶えゆくも一枕のけりてゆくもいふ

あしせぬわらうしどぐりまこたせふあわどハ貴も賤も存達窮
 亡きむらふのありしうち物さうてこころひつるよど人々も
 身小ハ後せざぬや片一丸志の男よとくまこれまのー々
 わび小流石小あがたま早のげも西山のつをた小後これ
 む青きまて業肉やわらまをへしとく人ハ男小道をとけ
 ませら其ましくそ急たぬぬ後小此心賤う身も如何ある者
 ありやまらた後乃巻くを関しとまらあむしり小こそ

二 兎企反

それ堯帝乃善も絆由小列く聖人とあり紂王の悪も崇侯
 小漆く周主より賢小親よのちのりは賢くし思小親
 者らうあし思ありうまを善人とまるとたハ達の麻乃中

小生むれ小ひしく技どしく自然垂し悪と争う時々児を
 抱く墻をこあぬの扱小何一人地小あちく二人ともり屍を
 後小ぬるましくを差小かりひらう小まふよふこれあひつる後ハ
 小の語しりく大政所小飯まると是ひく小軒曲の旗の多
 くいびりく阿羅縮ひをゆく私小ふたりぬまを下小賢才博
 智の業ましくいもど小が為小忠義乃行を能くしれも至
 織乃煙を何し守りみあがくおのづら善人の近きりれ
 悪人のそと威をませし差小仁本幼解由た清門後勝も大政
 所乃親属さるとはく小の基小出生る美丸のまを立真才
 祖又も権威小不ら且ハ子権正別務をせ小出さむやと大政
 所小悪事まをまめ義澄公を近けまあせ外小大政所を政

勢の廳しはらめて内小己うぢふさうしひ喜小但さうらひ
 とらまは家のお小忠あは者としくも挙く是を引ひ意
 小但さうらまらひしを天下のこま忠をそまの賢士と
 つくも無失乃罪を巧出しく是を返しとてくりりら
 山科左衛門右衛門正盛總表判官光長の兩人のこ早く此事成
 さうらう一町正盛光長の兩人銀閣寺小會合しくひそくに
 ぬれ乃大事を法合ふらひたれがこ正盛を出つら當時
 浪倭の者ども上小和欵をりひまふして故將軍の御素懐
 己小むあしくあらしこまの時節は小あし御身ふら何とて四
 尺つごごかたりたれを光長堂を撰く言ふる中うのれホが事ふ
 心をさる魂をあやさし侍らぬるるは唯其一つあふし小

うの大軍留時且夕の間小かきり光御身乃らまら
 りるを包むく光長小赤何うしとやいざと
 けくまごご云らる凡さる者小和ふ使も命を惜むて我と守
 忠忠を抱くるの志を肯とて何ふ命を惜むてのまら
 やらあを天下小改の考ふも浪者倭人の中しを討果して
 後功しお小中し世はまら命をたのめと云れれを光長ら
 かむむけく報く思ふまら報約をひそめて答つらはは
 めがく又御意殊務小おがすあつたれども其件乃ら
 忠士一人を失ひを命りぬるる事乃士百人を失ひる事
 かりした事あり光長希くちかた忠並ら人をそく久く
 小あら御法をすくは心あれを其義はら他の事小御

何りく然命をよもあはれ命しと云々もあぞ正感も特別の思
 業をめぐりしつゝ猶ありて光長すて云出くハ不肖の身博識
 敵小遠を引率しつゝ業近比鳴乎乃つゝ小ハ付れども空
 食玉りつゝ命漢去秦の河惠帝を廻せぬををさるる小
 戚夫人其子如意をまんとしつゝ群臣君の命と奈何にも
 せしめりあく鬼せし角をさるる折るる張るる命とせしめり
 て高止乃四民をまひのきく補佐とあしつゝ例もあはれ
 本六希左清門射光時清川判官後長孫代たる以重致相田希
 義遠乃四人を擲く義澄云乃補佐とあし幼稚乃君を儲の銀
 小ハ進せもあはれ程使あはれと語るる小ハ正感改をさるる
 云々乃正感の始をさるる小ハ似せども意事とせしめり

其君ありてまもつゝ其あはれをかり仁本乃今惡をばして
 志も其振ぎし深しだて四皓をわく君を守護するといふ
 とも正感を始しつゝ身も年かへ老はいとるか久し君の傍
 小生を死に官長久乃まうりつゝ小義者を得く刺客乃
 まうりつゝ小ハ如きつゝかこつゝ小ハれど上もあはれ長孫
 かりんし浮議是小一変しつゝ正感ハ下河東の郎小く光長ハ
 思濟つゝそつゝりつゝ此刺客とつゝつゝ小ハおれ妨しつゝあはれ
 使獲つゝ義死を者小つゝのつゝを云合と他つゝあはれをせ人
 ちつゝ才失つゝた針略少く唐去小ハれつゝあはれ世強つゝた同
 あんどうつゝ使獲乃義死かやつゝ諸小ハつゝあはれつゝあはれ
 た書ども小もまらせつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれ

仁木父子
邪謀成終



貞頭
主徒
山路
山
松
頼



貞頭

過ぬまども一日の寒さ成とつて子小あず冠を現るる其
 其功あり一日の官をきて昇小あず永世徳を授け其
 猶ふが子孫小流まかりかろが故小善をかきぬる乃故小お
 ぞくくあふは徐まふの慶何れか悪をすまの事小退け
 忘ぬふといつても患うあらず其牙小及ぶをありとを積
 心とかりあを積り海とありカを積り雲とあり雪と積
 子とあらず眼前小志教とこりかりられども仁本後勝
 が暴悪日を退く退過し推正則勝と心を合く義隆云を
 ぢたあふとましましんといは強謀を企親子須史厘のいふ
 明もした八松宅小りり只其も乃と心をあやほりて
 一ゆる折る小推正則勝と又後勝なり小あらずいふそ小悪

子の種くを物く小折る折る又小むいふく中家と日はの御
 企暗御意小志とこりてとハありり進くもこりて
 幼君乃御も小終くとろく天下乃君と定す終くも操
 もあふとこりて小義隆云家形を出入りていふも
 後成重小智仁勇を修く教者も修く其世
 たやとてハ小の心乃登もさうりてけりぬまが容易
 肉小光時俊長小を始くと重致義遠もんとつて一騎
 千のやとまるとその心乃登もさうりてけりぬまが容易
 小幼君と立命小の御さつていふもあつてこれ小付
 ともけりぬりて眼乃と痛くもいふ命た清門とま心感判
 官光長乃兩人あり平退くおのいふふたくとたれぬ

林小のしとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 こも山林小のしとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 彼よを退ししとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 勝冷咲しとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 わらふもあつれども其方の心得もあししとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 さすしとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 此蔵とさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 使者のたつとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 ちとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 奴とさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 士のたつとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく

候とたつとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 らしふとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 しとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 あとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 とさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 ぼとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 王郭路小とさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 積着の敷上小とさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 やとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 かりぬとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく
 をとさふも先蔵の荆棘萱草をかりりけく

倭臣後者乃一なる一のをこころして、
 其おこふ一所一つふら善ふ一つ一悪あり、
 謀きぬ道乃日一たふ、
 中々仁本幼解由左邊門後勝が娘小一前乃大政所の清室
 を、
 北乃基しを、
 奸佞小一と、
 年一むと、
 あく、
 さあ、

小怒を、
 守り、
 懸小、
 ち、
 り、
 か、
 て、
 ぼ、
 緘、
 ざ、



内家より慶流を承けし交世五帝為光が孫交世六帝
 為晴舟孫竜真小任つて文明九年丁酉五月夏濃小舟上
 を飲まじ父が白筆小書添へり劍助ハ是を忍びたり且
 習た且懐び心小い多や不知らし是れを承けし
 我々今今日まももがふた去氏の子ありしこの心得
 つまかお正しれた身ありと今まももか合せつてはあそ
 一度身をまもも再度先祖乃れ名を起し父祖乃れ誓懐と
 も散む下一丈夫世ふまきく何そ業次乃れ小舟伏せ
 やしおを妹乃田の女小懐てお預幸乃れ多しと月小綿
 流しと小滝乃本長者とて富集乃れ多しと月小綿
 云まもももまもも備り水のふとあり樹本を切しを勅し

て月小十五貫の備錢をとり登ち海山小く拉を剪る
 常の扱が五人十人しく剪るをいふ大本を唯一人しく伐
 倒しこれ其強刀なるをいふぬ者もさしたる夜も
 小舟小くりく疲をもつと守本力を送りく劍法を弼
 生樹乃本口一尺もくりあそを月八分小立をく躍りよりくハ
 是を切よ介をりて割らどくはきむ一村の男本其劍術を
 貴しとけく是を承けむ澤村乃案もけけく門下小飯
 一層よかしくしけさる者乃一何れも法要例角力持花刀
 と後才集り夏濃近江の両由ち此滝の劍助小付はる
 案凡三百八十九人中も家産竟の勇猛あり者百三人しと
 守まももも然も小昭目も手も山伸小くくもまももも

乃武士四人を其素内こころあはれに暮くらくしあそび青芝村あおしばむらままくまありし
 若子わかしの家いへにいままももぶぶせせししくく宿しゆくをを宿しゆく所しよももああくく
 やや篇せきししままののせせららししもも合あははしし程ほどははああららばばづづやや先ま此こ
 方かたへへくく己おのれがが小こああふふししののああいい入いりりししくくとと長なが者もの小こ物ものをを
 一夜ひとよををああまませせ玉たまののままりりしし物ものををああののままもも劍けん肋りぼくをを連つ
 へへるる人ひとののああららしし子こ細こままききしし其その夜よををああららしし止とめめららしし

忠臣山賤傳卷之二畢 本光

